学習院大学史料館
ミュージアム・レター
Gakushuin University
Museum of History
Museum Letter
No.47

特集号　講演会「前川國男と学習院大学」

ごあいさつ

わが国のモダニズム建築の旗手・前川國男の設計した学習院大学の校舎群が竣工してから、約60年の歳月が流れようとしています。

このミュージアム・レターでは、昨年9月18日に開かれた講演会「前川國男と学習院大学」（文学部フランス語圏文化学科主催・史料館等共催）を機縁に、前川が残した校舎群の魅力や、彼が設計の際に何を実現しようとしたのかなどについて、前川建築に造詣の深い方々に振り返っていただいたほか、前川の盟友・坂倉準三が関与した「学習院計画図」についても語っていただきました。

キャンパスの歴史ある建物の記憶を未来にどう伝えるのかということは重要な課題であると思われます。貴重な原稿をお寄せいただいた皆さまに心より御礼申し上げます。（史料館長 水野謙）

前川國男（1905−1986）とル・コルビュジエ（1887−1965）
ロンドンにて学習院大学のテーマとなる「都市のコア」を話し合う　1951年
写真提供：前川建築設計事務所

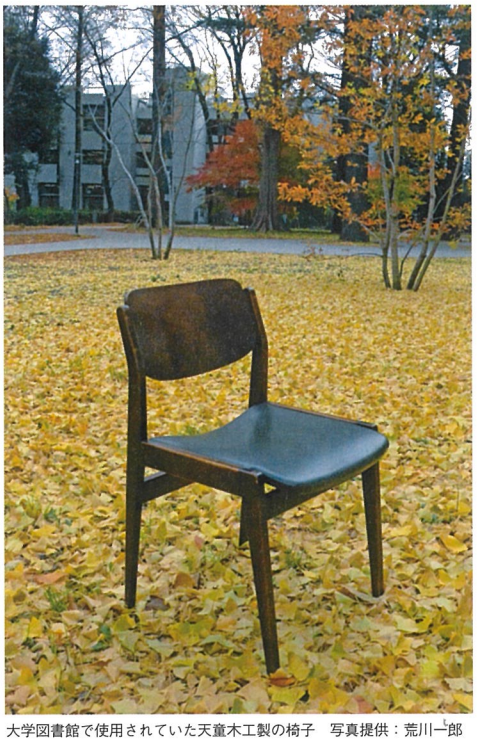
キャンパスの中の前川國男

学習院大学長　荒川　一郎

私が学習院に着任した1984年頃、初めて構内に入った人が一番驚かされるのはピラミッド校舎であったと思います。私もそうでした。モニュメントとして面白い建物だが、敷地効率が悪いなーなどと思っていました。その内、この建物は空を塞いでいないことに気がつきました。周囲の広場がより広く感じられ、その点では空間効率の良い建物なのだと感心した覚えがあります。ピラミッド校舎をはじめとして、旧本部棟、大学図書館、北1号館、南2号館、南5号館が前川國男さんの作品であることを意識したのはいつの頃か覚えておりませんが、自然と馴染みのあるものになって今に至っています。理学部の教員として最も出入りしたのは南2号館です。あちらこちらに不思議な造形があります。どのような必然性があってこのような形をしているのだろうか、と身も蓋もないことを考えてしまうのですが、見ていて、あるいはそばにいて、違和感もなくなんとなく快くなります。

前川さんの建築から少し離れますが、大学図書館では、前川國男設計事務所にいらした水之江忠臣さんがデザインされた天童木工製の椅子が使われていました。10年ほど前に、古くなったので捨てるというので、十脚ほどを引き取って今でも私の研究室にあります。先日、小金井の江戸東京たてもの園の前川國男邸を見学してきました。そこにも同じ椅子が保存・展示されていました。素人目ですが、その椅子にはなんとなく前川さんの建物と共通する曲線や構成があるような気がします。

旧本部棟は1991年に、ピラミッド校舎は2008年に解体されました。残る4棟は、当分の間、改修を加えながら使い続けられることでしょう。大学キャンパスには、前川建築と前川以前・以後の建物が混在して、さながら学校建築の100年に渡る年表を見ているようです。単に私の目が慣れてしまっているせいかもしれませんが、前川さんの建物はその歴史の半ばを画する物として、過度の主張をすることもなく、環境の中に好ましく収まっていると感じています。



大学図書館で使用されていた天童木工製の椅子　写真提供：荒川一郎

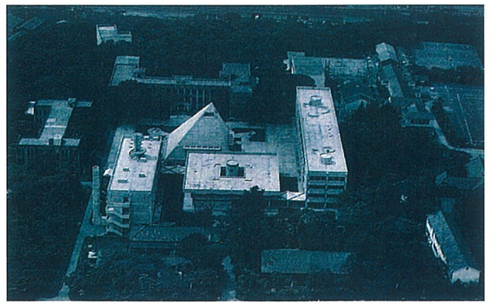
シンポジウムのその先に

前川建築設計事務所代表取締役所長　橋本　功

当初4月頃に予定されていたシンポジウム開催が、その後コロナ禍の影響を受け9月に延期となり、さらに収まらぬコロナ禍の拡大により参加者のオンライン配信で、2021年9月18日シンポジウム「講演会：前川國男と学習院大学」は開催された。主旨は「建築家前川國男による学習院大学キャンパス計画を資料とともに振り返り、現存する前川建築群の遺産価値の再確認」。主催は学習院大学文学部フランス語圏文化学科、共催は学習院大学文学会・学習院大学図書館・学習院大学史料館・学習院アーカイブズである。

学習院大学目白キャンパスには、1962年「学習院創立85年・私学再建15周年」にむけた記念事業の一環として、当時の安倍能成学習院院長に設計を依頼された前川の1960年竣工のピラミッド型の大教室を囲む本部棟、北1号館、南2号館の校舎群と1963年竣工の図書館、そして1983年竣工の南5号館があった。しかし本部棟は1991年、大教室は2008年に解体され、現在は大教室の跡地はピラミッド広場と名付けられて残っている。

7月10日、学習院大学史料館による図書館、北1号館、南2号館、南5号館の写真撮影の立会要請を受け、久しぶりに各建物をつぶさに見る機会を得た。竣工時コンクリート打放しの図書館、北1号館、南5号館の外壁や内部は、さすがに改修により白く塗装されていたが、それでも前川建築の特徴である空間構成の設えやディテールは健在で、これも改修後の復元と思われる前川カラーが鮮やかに残されていた。そこには前川が1960年代に取り組んだ空間手法による前川建築が、60年経てもなおゆるぎない存在感を放っていた。



竣工時のピラミッド校舎群　南2号館（左）、本部棟（手前）、北1号館（右）　1960年

講演にむけて

講演にむけて、自らに課した課題は、2つのテーマ「現存する前川建築群の遺産価値」と「前川國男による学習院大学キャンパス計画」について参加者にとって単なる建築分野の話としてでなく、如何に身近な話として理解してもらえるかということであった。

1909年（明治42）の目白キャンパス配置図
『学習院目白の学び舎』（学習院大学史料館編）より転載

周知されるように目白キャンパスには、正門はじめ乃木館（旧総寮部）、洋風に和風様式を取り込んだ北別館（旧図書館）、東別館（旧皇族寮）、ネオ・ゴシック様式の南1号館（旧理科特別教場）、西1号館（旧中等科教場）等々、我が国の明治・大正・昭和を彩る近代建築史上の貴重な文化財建造物があり、その見た目にもわかりやすい佇まいが伝統あるキャンパス風景の歴史を漂わせている。こうした文化財建造物が佇むなかで前川の建築はどのように理解されているのであろうか。

前川建築の歴史的・意匠的・技術工法的視点の解説は、それなりの理解は得られたとしても、一つの見聞・知見の習得で終わるだろう。そこで私が描いた講演のイメージは、現代を生きる学習院大学キャンパスという「場」は、先人たちが創造し継承してきた歴史のエネルギーが蓄積されて今日があるという実感と、その実感から得られる「場」への共感により、その歴史的な俯瞰のなかに前川建築の遺産価値を見出すことに繋がっていくことが出来るのではないかという思いであった。

前川建築群の遺産価値

そこで、前川國男が「我が国の近代建築・モダニズム建築をリードした建築家」というキャッチコピーから、そもそも「近代とはどういう時代か」、そして「近代建築とは何か」を発端として、絵画や文学・哲学そして建築の歴史的脈絡を辿り、そのうえで我が国の近代化の歴史のなかで、建築をとおして時代を生きた一人の人間としての「建築家・前川國男」が、それぞれの時代にどのような思いで建築に向き合ってきたか、その道筋のなかで学習院大学の建築に込めた前川の思いを語ることとしたのである。

すなわち我が国の近代建築史を俯瞰することで学習院大学キャンパスの明治・大正・昭和期の建築と前川の建築が歴史的脈絡でつながるという関係性の理解から、逆に前川の建築を語ることで明治期の建築を知るという視野が生まれ、前川建築の遺産価値の醸成につながると考えた訳である。

こうした視野は文学・哲学・政治・経済等の領域においても共通する姿勢と思っている。

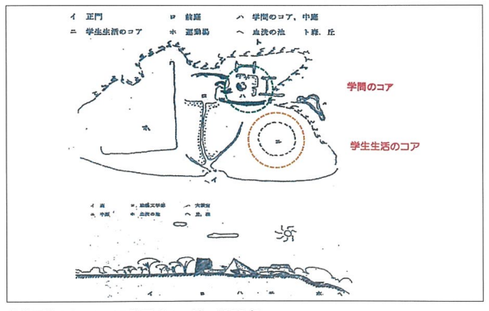
前川國男の学習院キャンパス計画

前川はピラミッド型の大教室について、「中庭を広々と感じさせるために4角錐としたが、大切なのは4角錐による象徴ではなく、人々を包み囲む広場なのである」と言っている。

前川のキャンパス計画は、キャンパスに2つの中心となる広場を設け、大教室のある中庭を「学問のコア」とし、北グラウンド側に「学生生活のコア」を設定し、いずれ増築されていく校舎群が、その過渡期においても、それぞれのコアを中心に年輪が拡がるような秩序ある風景をイメージしていた。

この2つの広場をコアとしてキャンパス全体を整備する計画は、史料館編の『学習院目白の学び舎』冊子によると、復元された1909年（明治42年）の目白キャンパスの配置計画にも、前川の計画とは位置も配置も異なるものの、共通する意図があったことが読み取れる。

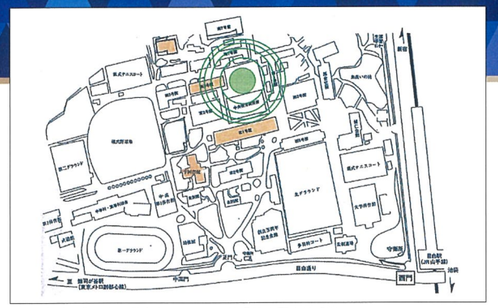
前川が明治42年のキャンパス配置計画を知っていたかは今となっては確かめる術はないが、先人が2つの広場を核としてキャンパス計画をイメージしていた事実からは、結果的に前川のキャンパス計画もまた同じ意図の継承と理解することができる。ならば現在の「ピラミッド広場」は、単に「前川のピラミッド校舎があった跡地」という記録の場所以上に、目白キャンパスの構成の歴史を物語る原型が引き継がれた記憶の風景の継承の場として、あり続けて欲しいと思う。



前川國男のキャンパス計画イメージ　1958年

シンポジウムのその先に

目前の受講者の反応を感じながらの講演会と違って、オンライン配信による講演は一方通行の感ありでなかなか難しいものであったが、それにしても講演開催にこぎつけた田上先生・史料館はじめ関係者の熱き思いと御尽力には敬意の念を禁じ得ない。今回の講演にあたって改めて61年前の竣工当時の前川建築関連資料を読み返し、また同時代の前川建築について再確認を行い、これをもとに講演会では前川建築に共通するデザインボキャブラリーの解説も行った。これは学習院大学にある前川建築を通してさらには全国に点在する前川建築への親しみを共有して欲しいとの思いによる。



2010年（平成22）の目白キャンパス　前掲書2頁より転載

今回は史料館編の『学習院目白の学び舎』冊子による目白キャンパスの変遷記録からは、多くのことを学ぶ機会を得た。その資料的価値はキャンパスにある歴史的建築物の解説に留まらず、時代を超えて育まれてきたキャンパス風景の歴史と同時に、特にこれからのキャンパスの在り様・方向性を考える上でも貴重と言えるところにある。

今回のシンポジウムを機に、今後学習院大学にある歴史的建築物と同時に前川建築について改めてじっくりと見て回りながら、自ら学ぶ学び舎が、いかに歴史と文化に恵まれた貴重な環境にあるということをより多くの学生が再確認するきっかけとなれば嬉しいことだと思う。

目白キャンパス　前川國男（1905－1986）建築一覧

竣工年	建物名（のちの名称）	
1960年（昭和35）	ピラミッド型大教室（中央教室）	解体（2001年）
	政経文学部棟（北1号館）	現存
	理学部棟（南2号館）	現存
	本部棟	解体（1991年）
1963年（昭和38）	大学図書館	現存
1983年（昭和58）	南5号館（大学計算機センター）	現存
1985年（昭和60）	男子高等科部室	現存

前川建築設計事務所にて
前川が使用していたデスクと椅子がそのまま使われている

前川國男が学習院大学の建築に求めたもの

京都工芸繊維大学デザイン・建築学系 美術工芸資料館 教授　松隈　洋

前川國男に学習院大学から戦後復興と新制大学発足の象徴となる校舎群の設計が依頼されたのは、1958年7月のことである。翌1959年6月に総合計画が完成し、8月に着工、約1年の工期を経て、1960年7月、4階建ての北1号館（政経文学部棟）と南2号館（理学部棟）、2階建ての本部棟、「ピラミッド校舎」と呼ばれる四角錘形の中央教室の4棟からなる延床面積約1万2千㎡の校舎群が竣工する。この建設により、焼失を免れた戦前の二つの校舎にL型に囲まれ、「グラウンドとして使用されていた空間は新築校舎群となってその様相は一変」[1]する。前川は、何を実現させようとしたのだろうか。設計チーフの河原一郎は、次のように記している。

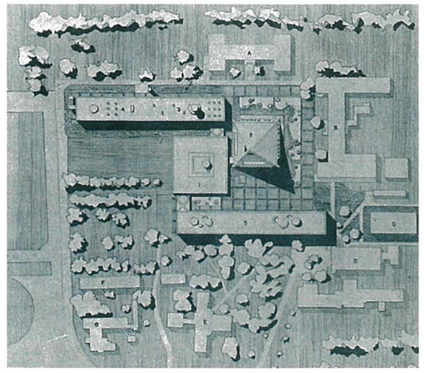
「森に囲まれた敷地は大学の敷地としてはきわめて恵まれているが、点在する建築群はわれわれを唖然とさせるほどの混乱ぶりを呈している。私どもはまず二つの中心、つまり学問のコアと学生生活のコアとを設定し、そこから始めて、年輪が拡がるように徐々に増築をしていく方法を考えた。」[2]

そして、校舎群で構成された「学問のコア」について、次のような説明が続く。

「武蔵野台地の上に一つの広場を据えてその周りを回廊やピロティで囲み、（中略）建物群のつくりだす空間の移り変りと拡がりの中に、修道院のような静かな瞑想的中庭をつくりだし、学問的な雰囲気をつくりだそうとした。

安い絹を着るよりは丈夫な木綿を着ようという質実剛健な精神に則っとり、工事費の安さに負けることなく知恵の塊である空間を生かすことによってこれをなしとげようとした。中庭の中の大教室は4角錐となったが、私どもに大切なのは4角錐による象徴ではなくて、人々を包み込む広場なのである。」

配置図〔図1〕に描かれたように、主要なテーマとなったのは、7.5×7.5mを基本グリッドとする厳格な秩序を敷地全体に与えつつ、2つの校舎棟と中央教室の足元にピロティを取って連続する回廊を設け、既存の2つの校舎との間を含めて、「学問のコア」となる広場



〔図1〕基本計画の配置図　『新建築』1960年10月号より転載

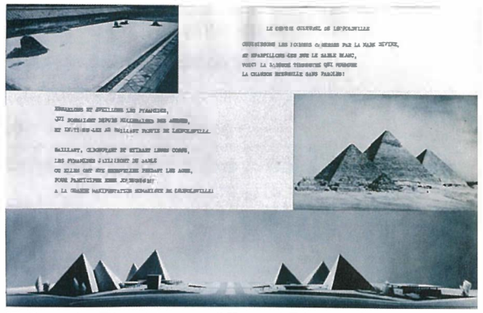
的な空間を創出することだった。だが、なぜピラミッド型の大教室〔図2〕になったのか。実は、当時は20mの高さ制限があったため、それを超えるピラミッド

著作権の関係上、掲載不可

〔図2〕理学部棟から自作建築群を臨む前川國男　1961年
Burt Glinn/Magnum Photos/アフロ

教室は、「高さ制限緩和許可願理由書」が東京都へ提出されて許可を得ている。そこには、この造形に込めた前川の意図が、次のように説明されていた。

「大学がその歴史と伝統に基き理想追求の場として、象徴を建築的表現に求める事は自然である。本大学も亦学制改革に伴って、大きな改新を求められ、新時代に適応すべく再出発、その象徴として清新なる表現を



〔図3〕レオポルドヴィル文化センター公開コンペ応募案　1958年＊

求めている。斯かる場合在来は『塔』を作る事により、その具体的表現として居たが、形式化した塔は建設費が徒に増すばかりで、本大学の理想からも遠い。出来れば構造的及機能的要求を満足させ、且経済的にも成立し得る造型を以って本大学を象徴しようと考えた。その為には700人を収容する集会の場としての大教室を選び、それを最も安定した架構で造り且、空間的にも十分な表現を持たせるように整理追求した結果『ピラミッド』形を生み出すこととなった。」[3]

前川は、戦前の権威の象徴のような「形式化した塔」ではなく、戦後型の大学像に相応しい集会と講義の行

〔図4〕ル・コルビュジエによるチャンディガールの建築群　1956～62年　撮影／筆者

われる大教室こそキャンパスの象徴にしたいと願ったのだ。また、ピラミッドの造形は、唐突に発想されたものではなかった。1958年に応募したベルギー領コンゴの首都に計画された文化センターの公開コンペ案〔図3〕において、前川は、ピラミッド型の複数の棟からなる群造形を試みていた。注目されるのは、龍安寺の石庭のように、ピラミッドの周囲に余白としての広場の創出が意図されていたことであり、この方法が学習院大学に引き継がれたのである。

こうして竣工した学習院大学は、そのモニュメンタルな造形が注目されたのだろう。国内にとどまらず、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアなど10誌にわたる建築雑誌に掲載される。中でも、フランスの『l' architecture d' aujourd' hui』（1961年10・11月号）には、6ページにわたって大きく紹介された。ル・コルビュジエもこの誌面を目にしたのだろう。感想の手紙が前川に届いたという。最晩年の前川の回想が残されている。

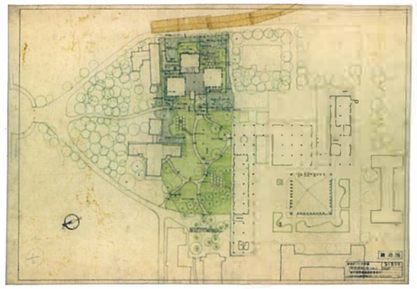
「学習院のピラミッド（中略）コルビュジエから手紙をもらって「面白いアイデア」だといって誉められたのはあれひとつだよ。その「はがき」をとっておいたら、犬がくわえてちぎっちゃったよ。（笑）」[4]

ル・コルビュジエが関心を示したのも無理はない。彼自身も、インドのチャンディガールの都市計画で、複数の建築と広場から構成された群造形〔図4〕を試みていたからだ。偶然にも、師弟は同じテーマを巡って競い合っていたことになる。

〔図5〕学習院大学図書館　1963年　正面西側外観　撮影／渡辺義雄

そして、続いて前川が手がけたのが、3年後の1963年に竣工する学習院大学図書館〔図5〕である。木造の旧図書館（1909年）は、関東大震災や太平洋戦争にも耐え、半世紀以上にわたって大切に使われてきた。しかし、1949年の新制大学発足後、急増する学生数と増え続ける蔵書に対応できなくなっていた。そこで、末松保和館長を委員長とする建設準備委員会が図書館構想を立案、「学生図書館という性格」に重点を置いた基本方針を決定し、再び前川が設計依頼を受ける。この時、前川は、「設計の基本となるようなアイデア」を館長に求めたという[5]。末松は、旧図書館の平面的特長である「十字型の意匠を現代風にアレンジする案」を伝え、それが新図書館設計の基本方針となっていく。

こうして、旧図書館の十字型平面をアレンジしたような、14.4×14.4mの正方形プランの3つの閉じた閲覧室や書庫のボリュームと開放的なロビーの組合せ



〔図6〕学習院大学全体配置図＊

からなる、リズミカルな空間構成が発想される。そして、全体配置図〔図6〕からも読み取れるように、正方形プランによる内部の単位空間の拡がりが、外部へと展開し、緑深い前庭とも相俟って、心地好い周辺環境をつくり上げたのである。設計チーフの美川淳而は、次のように書き留めている。

「この図書館は、今までの静かな、本を読むためだけの図書館ではなく、学生の生き生きした流れを、庭を通じて図書館の中に引き入れたかったし、またこの木の多い囲りの環境を、この建物を建てることによって、なお一層良いものにしたかった。またこの建物は、建物のエレベーションの恰好よさより、室内空間の良さ、庭とのつながりの方が重要だった。そのため、家具配置計画（中略）、家具設計に相当な重さをおいていた。（中略）柱の無い部屋に、壁、家具等にかこまれた読書コーナーが散らばっている、というのがわれわれのねらいだった。（中略）読書を中心とした集りの場所でありたいと考えた。」[6]

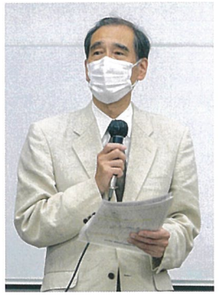
1950年代後半から1960年代初めにかけての高度経済成長が始まる時期だったとはいえ、厳しい予算状況と限られた時間の中にありながらも、このような考え方が連続して盛り込まれていたからなのだろう。前川が信頼を得て取り組んだ学習院大学には、象徴的なピラミッド型の中央教室を中心に置いた群造形による広場と、それと連続的につながる学生たちの生き生きとした「集りの場所」としての図書館が誕生する。これらの建物は、戦後の新制大学として歩み始めた学習院大学にとって、文字通り、「学問のコア」としての骨格となるものだったに違いない。そして、前川も、ここで得た群造形と単位空間の連続という設計の方法論を、続く埼玉県立博物館（1971年）から、東京都美術館（1975年）、熊本県立美術館（1976年）、福岡市美術館（1979年）など、最晩年に至るまで追求していくことになる。その意味で、学習院大学の建築には、前川の求め続けたものの原形が刻印されている。これらの建築が、これからも良い形で使われていくことを願わずにはいられない。

(1) 学習院大学五十年史編纂委員会編『学習院大学五十年史 上巻』2000年学習院大学発行，p.458
(2) 河原一郎「建築計画について」『新建築』1960年3月号
(3) 前川國男「学習院大学新築工事に関して　高さ制限緩和許可理由書」東京都公文書館内田祥三資料
(4)「建築における《真実・フィクション・永遇性・様式・方法論》をめぐって」『新建築』1984年1月号
(5) (1)に同じ，p.643-645
(6)『建築』1964年1月号

＊資料提供／前川建築設計事務所

講演会「前川國男と学習院大学」

学習院大学文学部フランス語圏文化学科教授　田上 竜也



学習大学学長あいさつ

前川國男による学習院大学の校舎群は、1960年の本部棟や中央教室棟などの中心的施設に始まり、1963年の大学図書館、1983年の南5号館に至るまで、3期にわたり建設された（加えて1985年に男子高等科部室が竣工）。2020年は、最初の建物群が築後60年という人間に喩えれば還暦の、節目の年に当たる。この機会に前川建築の価値を再確認し、今後の保存活用のあり方を考えるための講演会を企画した。あいにくのコロナ禍により、会は1年の延期を余儀なくされたが、Zoomによる配信中心に実施形態を組み替え、2021年9月18日土曜日14時から2時間あまり、関係者のみの会場参加に、約100名のオンライン視聴者を加えて開催された。現地での対面式とZoomによる参加とを組み合わせた形式は、大学の授業において用いられているとはいえ、一般にも開かれた講演会ならではの技術的困難も予想されたが、幸い大きなトラブルもなく行われた。主催は文学部フランス語圏文化学科によるものではあるが、共催者として多大なご助力をいただいた本学文学会、図書館、史料館、アーカイブズのみなさまには改めて深く感謝申し上げる。

会においては、冒頭の趣旨説明、荒川一郎学長と水野謙史料館長による挨拶に続き、前川建築設計事務所の橋本功所長が、「日本の近代建築史の流れと目白キャンパスの前川建築」というタイトルで講演をなさった。その中では、まず西洋と日本の近代建築の流れを俯瞰的に辿ったのち、前川建築の展開を、軽量化の時代・ブルータリズムの時代・打ち込みタイルの時代と3区分した上で、技術革新の要請がデザインと密接に連動していること（テクニカルアプローチ）が説明された。さらに、前川の敷地計画において重要な「広場」の概念が、学習院大学においても中核的な役割を担っており、またそれは戦前からの学習院の校舎配置を引き継いでいるのではないか、という指摘がなされた。

続く松隈洋京都工芸繊維大学教授の「前川國男と学習院大学－前川國男の求めたもの」と題された講演は、会場外からのリモート形式で行われた。そこではまず前川がル・コルビュジエやアントニン・レーモンドから学んだものについて検討したのち、「都市のコア」という概念を中心とした、群造形の構成による前川の学習院大学キャンパスプランについて解説がなされた。さらに前川が学習院大学の校舎とともに写っている貴重な写真を披露していただいた。

講演会場にて

講演の後の質疑応答の時間では、坂倉準三による知られざるキャンパスプランと前川案との比較や、前川と坂倉との個人的関係、前川建築の魅力などについての質問があり、裏話も交えた興味深い応答がなされた。

この講演会を通じて痛感したのは、まず学習院大学に残された前川建築の貴重さと、それぞれに示された作風の多様さである。3期にわたって建てられた校舎群のうち、1960年当初のもので現在も残されているのは北1号館と南2号館のみだが、いずれも立面やユニテ・ダビタシオンを想起させる塔屋の造形が、ル・コルビュジエの強い影響を窺わせる。63年竣工の図書館は、プレキャストコンクリート やプレストレストコンクリートを多用した技術的な工夫により、広々とした内部空間を実現している。さらに83年の南5号館を特徴づける勾配屋根は、国会図書館新館など前川晩年の作品に見られる要素だが、これはモダニズムの定式であるフラットルーフに対して、より日本の気候に順応するべく導き出された方策と言えるだろう。

さらに強く感じたのは、前川が当該計画に託した精神的理想である。「現代の文明における人間の恢復という重大な20世紀後半の課題を背負われる青年薫陶の場として、先づ学園に於ける人間の復興が先決であると考え[1]」た前川にとって、彼が生前携わった唯一の本格的な学園計画であるこの事業こそが「建築の高貴さ」を具現化する舞台であり、近代合理主義の理想や精神性を担うべき場であったのではないだろうか。「安い絹より丈夫な木綿を着ようという質実剛健な精神[2]」に則り、コンクリート打放しを駆使した校舎群はローコストながらも、「生き生きとした人の流れ」を生み出すべく巧妙に配置され、その中心をなす「学問のコア」の中庭に与えられた「修道院のような」という形容が、この計画に託された思いを如実に示している。

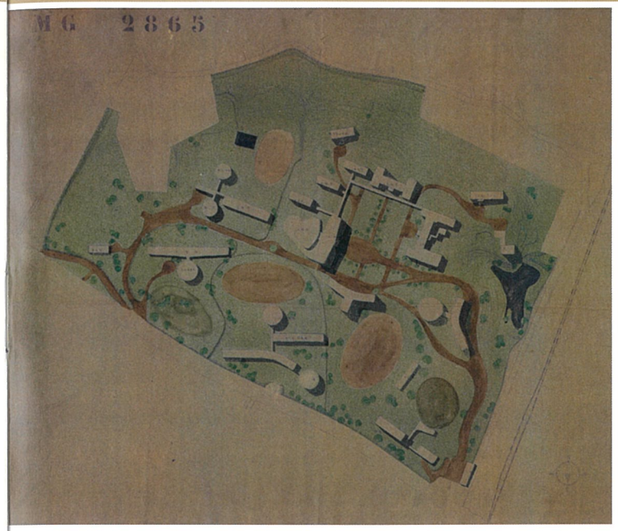
前川がル・コルビュジエのもとで学んだ近代合理主義に基づくモダニズムの美学と、日本の実情との間の対立、葛藤は、彼の生涯の歩みを方向づける大きな要因であった。前川自身、近代合理主義の理念に限界を感じ、疑念を抱く機会がしばしばあり、そうした際には、ヨーロッパ精神の危機を論じたポール・ヴァレリーの言説を幾度も引用している。西洋近代と向き合い、日本の風土といかにして溶け合わせていくか、という問題は、単に建築にとどまらず、戦前戦後の日本の歩みにとって普遍的な意味を持っている。学習院という、ある意味「伝統」をどこよりも意識せざるをえない場に作られた前川のモダニズム建築を、後世どのように評価していくべきか、という問いは、そうした問題とも繋がっているように思われる。

橋本功氏（右）とともに

(1) 学習院大学工事概要「設計者のことば」
(2) 河原一郎「建築計画について」『新建築』1960年3月号

坂倉準三の「学習院計画図」

学習院アーカイブズ　桑尾 光太郎



〔図1〕学習院計画図

2021年9月18日に開催された講演会「前川國男と学習院大学」において、学習院アーカイブズが所蔵する「学習院計画図」〔図1〕（坂倉準三建築事務所作成、図面番号2865 1951年9月10日）が紹介された。前川國男がとりくんだ目白のキャンパスプラン以前に、前川の盟友である坂倉準三（1901～1969）が学習院に関係していたことを示す資料として関心を集めたため、この機会に現時点でわかり得たことと、数多い不明な部分を記しておく。

「学習院計画図」は、2011年に施設部施設課から学習院アーカイブズに移管された古い施設関連の文書や図面類の中から発見された。〔図1〕のように彩色された図面と、彩色されていない図面各1点で、折りたたまれて「目白配置図　昭和二十六年　坂倉準三氏案　小山」と表書きされた封筒に収納されていた。「小山」とは学習院常務理事等を歴任した小山直彦（1899～1976）のことで、小山の手元に長らく保管されていたと考えられる（小山直彦に関しては拙稿「「財団設立関係資料」―私立学習院を支えた人たち」『学習院アーカイブズ・ニューズレター』17号（2021年2月20日）参照）。

「学習院計画図」の特徴を簡単に挙げると、まず正門が図右下側目白駅寄りの、現西門（通用門）の位置に移されている。ちなみに西門が実際に設置されたのは1963年のことである。またキャンパス中央に大講堂を備えた本部が設置され、既存の本館（現西1号館）・理学部実験棟（現南1号館）ほかで構成される大学と、正門付近から短期大学、女子中・高等科、中等科、高等科の校舎群がそれぞれ円型の雨天体操場を備えて配置されている。〔図1〕の大きさではわかりづらいが、右側の池（血洗いの池）の左下に配置された校舎は「アートギャラリー」と名付けられている。1951年当時、中等科、短期大学、女子中・高等科は戸山キャンパスに設置されていた。戸山キャンパスはまだ学習院の所有ではなく国から借り入れる形の借地であったため、戸山にあった学校を移し、四谷にある初等科を除いて、目白に集約させる構想だったと考えられる。

1945年4月13日の空襲で、目白キャンパスは本館・教室棟・寄宿舎ほか主要な木造校舎を焼失した。1947年に撮影された航空写真〔図2〕では、現北グラウンドや野球場付近にかつての校舎の焼け跡が生々しく残されている。学習院は残された校舎を使いながら同年に宮内省の管轄を離れて私立学校として再出発し、1949年には学習院大学が開学し校舎も徐々に整備されつつあった。しかし、1951年に坂倉が「学習院計画図」を描いた頃は、同年発表された「学習院院歌」（安倍能成作詞）のように、「破れさびし　廃墟の上に　たちあがれ　新学習院」という詞は現実の世界であった。

〔図2〕目白学習院付近航空写真　1947年

坂倉による計画図がその後どのように扱われたか定かではない。わずかに1951年9月26日の学習院理事会において、「学習院の将来計画の図面（富永教授案）について常務理事から種々説明を行つた」との記録が残されており、このときの図面が「学習院計画図」であったと考えられる。富永惣一（1902～1980）は、学習院高等科卒業後、東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学して坂倉準三とは同級生として親交をもち、1927年より学習院に着任した。戦後は学習院の財団法人化とその運営に尽力し、学習院常務理事及び学習院大学教授をつとめ美術史研究において活躍した。1959年には学習院を退職し国立西洋美術館初代館長に就任している。

目白キャンパス計画の立案が坂倉から前川にどのようにバトンタッチされたかも定かではないが、1958年前半には大学校舎建築を総合計画とする方針が固まり、前川國男建築設計事務所に下検分が依頼された。同年10月16日の理事会において、安倍能成院長は「今迄の計画はむしろゆきあたりばつたりの感があつたが今後は組織的に計画を立てることが必要であり、富永教授の友人の前川氏にお願し、暖房、通風、上水道下水道等整然とすることにした。この費用もついては他よりも多少高いように思われるが恒久的なことを思へばやむを得ない。この計画は本年中には出来上る見込みである」と述べている（『学習院大学五十年史　上巻』2000年）。

なお、『大きな声　建築家坂倉準三の生涯』（「大きな声」刊行会編 1975年）に収録されている「坂倉準三年表1901～69」には、1941年の作品として「学習院計画案」が記載されている。「学習院計画案」がどのようなものか筆者は全く手がかりをつかめておらず、この計画案が事実とすれば坂倉と学習院との関係は戦前からのものだということになる。学習院を通して、坂倉と前川そして富永惣一との交流がどのようなものであったかも、資料からは明らかにされていない。課題は多く残されたままである。

学習院大学目白キャンパスの歴史ある建物の保存と活用

学習院大学目白キャンパスでは、明治から令和までの時代を映す建造物が存在している。平成21年(2009)に正門、厩舎、乃木館、北別館、東別館、西1号館、南1号館の7棟の建造物が国登録有形文化財に指定され、現在本学では保存活用が認識されるに至っている。

〔図1〕学習院大学図書館　ひじ付椅子が置かれた1階ロビー　1963年

しかし、それ以前は各建造物に対しての重要性があまり顧みられて来ず、古い建物があいついで姿を消していったことも残念ながら事実である。学習院大学史料館(以下、当館)では、今後の保存活用に対する危機感から、平成11年(1999)に文化財建造物の保存と活用を専門とする東京理科大学工学部建築学科・伊藤裕久教授に調査を依頼し、一連の建物の近代的学校建築としての重要性が実証された。

その結果を基に展覧会・講演会を開催したり、ミュージアム・レターなどで特集を組む等の広報活動を地道に重ねた結果、国登録有形文化財の指定という形で保存活用に繋げることが出来た。

現存する前川建築 ―北1号館、南2号館、大学図書館―

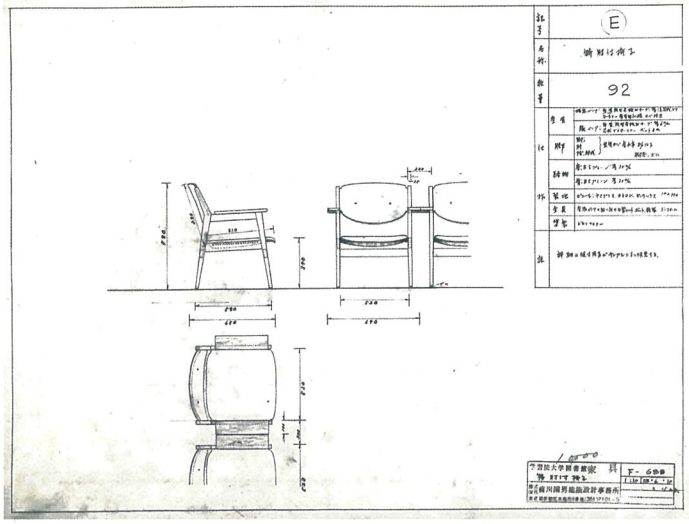
昭和34年(1959)から建築家・前川國男が手がけた建築群についても無論保存活用の対象である。前川によって目白キャンパスには、本部棟(昭和35年)、政経文学部棟・北1号館(同年)、理学部棟・南2号館(同年)、ピラミッド型大教室・中央教室(同年)、大学図書館(昭和38年)、計算機センター・南5号館(昭和58年)、男子高等科部室(昭和60年)の7棟が誕生し、本部棟と中央教室を除く5棟が数度の改修を経て現在も使用されている。

また、建造物だけではなくピラミッド型大教室の部材や調度品についても保存活用がされており、ここでは大学図書館を例にその一部を紹介する。

キャンパスプランにおいて前川は建築そのものだけではなく照明、配電ボックスやドアノブ、机や椅子、ごみ箱といった細部の調度品にまでこだわり、デザインした。下図の2種の椅子図面は大学図書館のために作られた。

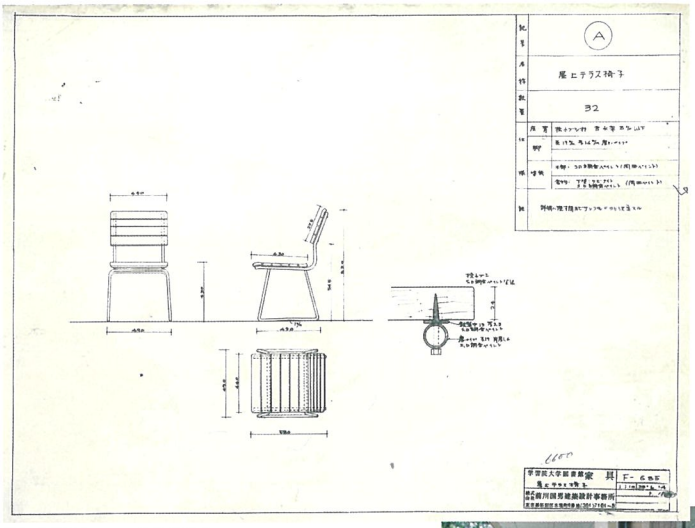
「特肘付椅子」〔図2〕は手すりと背もたれのある低めの形状で、体を包みこむように丸みを帯びた座面と、背もたれには少し緑がかった深い暗青色のビニールクロスが貼られている。両手のひじ付部分は木製であたたかみを感じる仕上げである。この椅子は長年使いこまれたことで照りと色の深みが増し、一種の工芸品のような美しさを湛えている。

「屋上テラス椅子」〔図4〕は、開館当初、屋上テラスに置かれた椅子で、澄んだ水色に塗装されている。キャンパスの賑わいから少し離れた緑の木立に佇む図書館のどっしりした外観と落ち着いたテイストの調度品に囲まれて重厚感のある雰囲気の館内から、読書の合間にテラスへ出てこの椅子に座って外の空気を吸い、木々の葉音に耳を傾けることが出来る。



〔図2〕「特肘付椅子」図面

〔図3〕2021年10月開催の学生による朗読会第6回〈声でつむぐ辻文学〉『北の岬』でも使用された



〔図4〕「屋上テラス椅子」図面

〔図5〕大学図書館2Fバルコニー　2021年

未来へつなぐ取り組み ―建物の持つ「記憶」を伝える―

当館では、これまで紹介してきた目白キャンパスの建物のほか明治10年(1877)の開校以来、学習院が使用した神田錦町、虎ノ門、四谷キャンパスについても調査を行ってきた。調査を進める中で、建物そのものの保存もさることながら、それらが持つ「記憶」も後世へと繋いでいきたいという思いが生まれ、建物内外の現地見学会や講演会、展覧会などの開催を通じて伝承の機会を設けている。令和4年(2022)春には、四谷時代の学習院についての企画展を開催予定である。(「揺籃期の学習院－四谷校地のころ－」展/3月28日～6月3日)

また、国登録有形文化財指定を記念した『学習院 目白の学び舎 学内に遺る歴史ある建築』(平成22年/丸善プラネット)や文化財としての校舎の改修工事の全記録である『学習院 南1号館 再生した旧理科教場』(平成25年/同上)など出版物の発行も積極的に行い、建物の魅力をまとめた。近年では、上皇陛下(当時皇太子明仁親王殿下)ゆかりの寄宿舎であった小金井清明寮(昭和24年)と目白清明寮(昭和26年)について戦後の学習院が置かれた混迷とした状況を象徴する建物として紹介した(「学習院大学史料館紀要」第22号、第24号)。

前川建築についてもキャンパスの中心にあったピラミッド型大教室の解体過程の定点撮影を記録として残した『学習院キャンパス写真集 ピラミッド校舎の記憶―前川國男作品・中央教室―』の刊行や、建築部材の調査・研究の結果をまとめた展覧会で情報発信した。

さいごに、歴史的建造物を守り伝え、活用するために行ってきた活動の中から、キャンパスツアーについて紹介する。目白キャンパスは、開校から113年経た今でも当時とほぼ同じ自然と地形のまま各時代を映した建造物を有しており、「キャンパス全体が巨大な博物館である」とも言われている。ツアーでは、学芸員が学習院の歴史を説明しながら、目白キャンパスの建物や学習院の歴史を語るうえで欠くことはできない石碑などの「ミュージアムピース」を案内する。建物の外観や特徴を説明するだけでなく、参加者がその中を実際に歩き回って外を眺めたり、部材に触れたり、建築空間を身をもって感じていただける機会となっている。

(史料館学芸員 冨田 ゆり)

※現在は感染症拡大防止のため、キャンパスツアーは中止しております。

〔図1〕 撮影／渡辺義雄
〔図2〕〔図4〕 資料提供／前川建築設計事務所
〔図3〕〔図5〕 撮影／滝澤国敏

ミュージアム・レター第47号
令和4年(2022)2月15日発行
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
電話 03(5992)1173
FAX 03(5992)9219
Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館
https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua